

あせちし



第 122 号

2024 年 9 月
日本野鳥の会三重 <http://miebird.org/>



今年の春、国内最大の渡りの中継地である佐賀県の東よか干潟に春のシギ・チドリを見に行ってきた。バーダーの間では東よか干潟を大授搦(だいじゅがらみ)と呼ぶ人が多いです。大授搦は佐賀県の有明海北部に広がる泥質の干潟で、潮の干満差が日本一大きく、干潮時には広大な干潟

が姿を現します。潮が満ち干潟が小さくなってくると、遠くにいるシギ・チドリの群れが一斉に飛び立ったり、目の前を横切ったり、旋回したりします。その圧倒的な数と迫力に、とても感動しました。大授搦はシギ・チドリの渡来数日本一を誇ります。



図1 大授搦の干潟上を飛ぶシギ・チドリの群れ

目次

日本一のシギ・チドリの渡来地	
「大授搦」とは	2
表紙の言葉	2
2024年ひるがの高原・	
普正寺の森 宿泊探鳥会	8
ハシボソミズナギドリの思い出	10
国際サシバサミットに参加しました	12
ツバメの見守りありがとう	
～ツバメの子育て応援事業～	14
志登茂川における	
シギ・チドリ類の分布と食性	15
野鳥記録	16
推しの一枚 ハシボソミズナギドリ	19
2024年度 日本野鳥の会三重 総会	20
代表就任のあいさつ	22
事務局だより	22
理事会報告	23
探鳥会予告(2024年10月～12月)	23
探鳥会報告(2024年4月～7月)	24
編集後記	28

表紙の言葉

オオミズナギドリ

津市 平井 正志

翼を広げると120cmにもなる、大型の海鳥。三重県でも紀北町紀伊長島沖の大島で繁殖する。といっても、会員にはなじみの薄い鳥であろう。陸地にめったに近づかず、フェリーなど、外洋を航行する船から見る以外に、目にする機会は少ない。もっとも、近年、秋の一時期、鈴鹿川河口付近の海岸に近づく個体があることが分かってきた。海上では波頭のすぐ上を帆翔と羽ばたきを繰り返しながら優雅に飛び続ける。波で生じるわずかな上昇気流を利用しているのだろう。繁殖の時に島に降りる以外は一生を海で暮らす。詳しくは「しろちどり」104号の記事を見られたい。



図2 柵越しに水鳥を観察するバーダー

三重県の雲出川河口や金剛川河口の干潟でもシギ・チドリの大きな群れを見ることはありますが、数は多くても1,000羽を超えることはありません。それが大授搦では4,000～5,000羽とも言われています。噂に聞いていた大授搦のシギ・チドリは想像以上の数でした。

潮の干満差は日本海側では小さく、太平洋側では2～3m程度ですが、有明海の干満差は最大6mもあるそうで、大潮の満潮近くになると干潟の鳥たちは満ち潮に追われるように柵の近くまでやって来ます。日によっては柵の上に乗ったり、

柵の内側に入ったりすることもあるそうです。有明海の潮位をネットで調べ、潮位表で潮高が5mを超える日を選び、5月7日から5月10日の4日間、大授搦を訪れました。とはいえ。潮位は風向きや風の強弱によって予測通りにならないことがあります。5月9日以外は思ったより潮が小さく干潟が50～100m残りました。

干潟との境には柵があり、柵の手前からの鳥見になります。大授搦は東西約2kmあります。バーダーは干潟に入ることはできません。



図3 シチメンソウが広がる大授搦の海岸

干潮時は柵の向こうに広大な泥質干潟が広がり、柵の手前の海岸には、世界的にも珍しく、日本では九州の限られた地域でしか見ることが出来ない塩生植物で、絶滅危惧種のシチメンソウが群生しています。「海の紅葉」ともいわれるシチメンソウの紅葉の時期は晩秋で10月下旬から

11月中旬にかけて、大授搦の海岸を真っ赤に染めるそうです。一度は見てみたい「海の紅葉」ですが、紅葉の時期がシギ・チドリの春・秋の渡りとずれる為、渡りと一緒に見られないのが、シギ好きな私には残念です。



図4 線状に広がり採餌するシギ・チドリの群れ



図5 近寄って来たシギ・チドリ

図4のような横長に延びた群れが数か所に分散して見られました。この日は満潮時になっても80～100mの干潟が残りました。

干潟が多く残っていれば鳥も遠くなりますが、5月9日は潮が柵の近くまで押し寄せて来て干潟はほぼ無くなりました。鳥たちも柵の10～30mまで近寄ってきました。群れの中に珍しいシギ・チドリがないかを状況に応じて、カメラや双眼鏡で、望遠鏡で探しました。鳥は密集した群れの中で動くし、時にはカラスも襲ってきて一斉に飛び立ったりします。三重県ではカラスがシギ・チドリを襲うのを見たことはありませんが、大授掬のカラスは猛禽化しています。目の前でハマシギがカラスに食べられてしまいました。

図4の距離では鳥個々の撮影は無理ですが、図5の距離だと鳥が重ならなければトリミングすれ

ば種の識別が出来る画像にはなります。5月9日は500mmのレンズに1.4のテレコンを装着していました。密集している群れの中の鳥を双眼鏡または望遠鏡で確認してからカメラに持ち替えるので、狙った鳥から一時的に目を離すことになり見失ってしまったりします。最も撮りたかったヒメハマシギがそうでした。望遠鏡で見つけて、カメラに手を伸ばしたその時にカラスが群れを襲いました。群れが一斉に飛びあがったため、ヒメハマシギを見失い、その後も、その次の日も探せず残念な思いをしました。大授掬で観察した20種のシギ・チドリの内、地元三重県で見えないのはヒメハマシギだけだったからです。個々の撮影には鳥が多すぎるのも良いことばかりではありません。鳥の少ない三重県の方が個々の撮影にはいいなとも思いました。

2024年5月7日から5月10日の間に大授揚で観察したシギ・チドリ類は20種でした。
メダイチドリ、オオメダイチドリ、ムナグロ、ダイゼン、ヒメハマシギ、キョウジョシギ、トウネン、

ウズラシギ、ハマシギ、サルハマシギ、コオバシギ、オバシギ、キリアイ、シベリアオオハシシギ、アオアシシギ、キアシシギ、オオソリハシシギ、ダイシャクシギ、ホウロクシギ、チュウシャクシギ



図6 左からメダイチドリ、メダイチドリ
サルハマシギ、ウズラシギ



図7 オオメダイチドリ
寝ているのはトウネンとメダイチドリ



図8 オバシギ



図9 キリアイ



図10 コオバシギ



図11 シベリアオオハシシギ



図 12 飛び交うシギ・チドリ達とヘラサギ、クロツラヘラサギの混群



図 13 騒ぐシギ・チドリ達ヘラサギとクロツラヘラサギは合わせて 20 羽いました



図 14 飛び交うシギ・チドリの群れ

大授搦を訪れ、これほど多くのシギ・チドリが集まる場所が国内にあったのだと知りました。全国的に減少しているシギ・チドリですが、三重県でも、近年増えているミヤコドリを除くと、シギ・チドリは著しく減少しています。大授搦にいとシギ・チドリの減少など頭に浮かんでこない。ここは日本一の渡来地だということを実感しました。

大授搦は満潮・干潮の時刻と潮位を意識して出
かけないと、せっかく訪問したのに、干潮なのに、
鳥が見られない、そんな状況に陥ってしまうかも
しれません。大授搦の鳥見は潮位が5mを超える
日の満潮2時間ほど前から、満潮前後の鳥見です。

なお、大授搦の干潮では水鳥だけでなく三重県
では見ることのできない泥質干潟特有のユニー

クな生き物も楽しめます。ムツゴロウやトビハゼ
などです。ムツゴロウが近くに現れると興奮して
シャッターを押していました。佐賀県に行けばど
こにでもいるだろうと思っていたカササギは、そ
うではなかった。カラスとの競合で絶滅の危機に
あるとか。訪れて初めて分かることもありました。



図 15 カササギ



図 16 カササギ



図 17 ムツゴロウ



図 18 トビハゼ

大授搦での水鳥の観察は4日間とも条件の良
い午前中で切り上げ、午後からは田園のカササギ
探しと、佐賀市と小城市の公園を巡りました。池
のある整備された公園がいくつかあり、トンボが
棲みやすい環境が整っていましたが、トンボは時

期が合わなかったのかほとんど見ることはなかつ
た。また、秋の渡りの9月か、シチメンソウが紅
葉する11月に大授搦を再訪問したいと思ってい
ます。